

令和 4 年 5 月 16 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01199

研究課題名(和文)「予見(prevision)」をコア概念とした統合的思想史の構築

研究課題名(英文) Construction of an integrated history of ideas with "prevision" as a core concept

研究代表者

田中 純 (Tanaka, Jun)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10251331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「予見(prevision)」という概念の思想史的な系譜をたどったうえで、芸術作品の制作・受容における予見の作用や、政治的危機の予見(不)可能性を分析することにより、予見が認識・制作・政治の各次元で、実践的なアクションを促す、積極的な効果を有する営みであることを解明した。さらに、予見がそのような効果を生み出すメカニズムの多面的な考察を通して、予見が未来にのみ関わるのではなく、記憶や想起とも深く関係する、複合的な時間性をもつ行為であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「予見(prevision)」をコア概念とする独自の問題設定によって、知覚・認識メカニズムをめぐる思想史、芸術作品の制作・受容をめぐる芸術学、カタストロフィをめぐる政治思想といった、複数の異なる学術領域を架橋する、いままでにない知的展望を開拓した。その展望は、コロナ禍や戦争をはじめとする同時代現象ともリンクする、「危機的時代における予見(不)可能性」というアクチュアルな思想的課題への実践的な応答をも可能にするものであり、その点に本研究の社会的意義があると言える。

研究成果の概要(英文)：This study traced the genealogy of the concept of "prevision" in the history of ideas and analyzed the effects of prevision in the production and reception of works of art and the (im)possibility of foreseeing political crises. It found that prevision as an activity positively contributes to each dimension of perception, production, and politics, and invites practical action. Furthermore, through a multifaceted examination of the mechanisms by which prevision produces such effects, this study concluded that prevision is an act with a complex temporal nature, relating not only to the future, but also to memory and remembrance.

研究分野：思想史

キーワード：予見 未来 知覚 表象 芸術制作 カタストロフィ 歴史哲学 危機

1. 研究開始当初の背景

本研究は、その学術的背景としてティム・インゴルド(『メイキング』)やカルロ・セヴェーリ(『キマイラの原理』)に代表される近年の人類学的な芸術論(模索や逡巡をも含む制作知的な予見)、ホルスト・ブレードカンプの像行為論が再発見した「一望」(ライプニッツ)のイメージ論(微小表象から生成するイメージとしての予見)、ヴィンフリート・メニングハウスの提唱する経験美学による知覚分析(感覚的経験に内包される予見)、ジャン＝ピエール・デュピュイの破局論(アクションを主導する志向性を帯びた予見)などと問題構成を共有し、《予見的な知が一見してそれと相反するかに思われる記憶や想起とも接続する複合的な時間性と連動し、かつ新たな認識=経験を創発しながら行為をうながすメカニズムはいかなるものであるのか》を核心的な問いに据えて、その解明を目標とした。

2. 研究の目的

本研究における「予見 (prevision)」は、漠たる「予感」や多分に偶然的な「予想」、逆に蓋然性にもとづく「予測」からは区別されつつ、それらすべてと連関した統合的なヒューマニティ(知性・感性・身体性のアンサンブル)の作動モーメントを仮説的に指し示す概念である。本研究は「予見」という概念を仮説上のコアとし、その内包をまずは思想史に依拠しながら解明するとともに、制作論のみならず受容論を含む広義の芸術学、また、カタストロフィ論を中心とした同様に広義の政治学を架橋しながら、その外延を探索することを目的とした。その際、「予見」が認識、制作、政治の各次元でアクションを促す積極的なメカニズムを解明することで、本研究それ自体が一個の発見法的な知の創出の場となることをめざした。

3. 研究の方法

本研究では、3つのメイン・テーマ「予見の思想史」、「予見のポエティクス/エステティクス」、「予見のポリティクス」を立て、それぞれを次の4つのサブ・テーマに分割したうえで研究を進めた。

予見の思想史：1) 徴候的知としての予見、2) 予見モデルによる近世感情論の再検討、3) 予測処理理論による表象モデルの再検討、4) 予見モデルによる社会思想の再検討

予見のポエティクス/エステティクス：1) 予見におけるアクターとの相互作用、2) 前衛芸術における制作と予見の契機、3) 作品と予見の時間構造、4) 音楽聴取における予見的機制

予見のポリティクス：1) カタストロフィ論と予見の可能性、2) 歴史における予見、その政治的な射程、3) 救済論における予見の時間構造、4) 性/身体のパリティクスと予見的パフォーマンス

4. 研究成果

「予見の思想史」をおもなテーマとする初年度の2019年度には、キックオフ的な研究集会として、2019年5月18日(土)～19日(日)に東京大学で開催された国際シンポジウム・フンボルトコレク東京2019「神経系人文学と経験美学」に共催の形で関わり、マックス・プランク経験美学研究所のメニングハウスや坂本泰宏など、ドイツにおける経験美学や神経系人文学の代表者たちと集中的な討議を行なった。これによって、次年度2020年度のテーマである「予見のポエティクス/エステティクス」へとつながる、芸術制作において作動する予見の機制を解明する研究の足がかりを得た。このシンポジウムとも深く関係している、2016年4月にブレードカンプらを招いて開催された国際シンポジウム・フンボルトコレク東京2016「思考手段と文化形象としてのイメージ」を契機に坂本らと継続してきた国際共同研究の成果は、本研究の研究代表者である田中純と坂本らの編になる論文集にまとめられ、特別にメニングハウスらの寄稿も得て、2020年にドイツで出版されている(Bilder als Denkformen: Bildwissenschaftliche Dialoge zwischen Japan und Deutschland)。田中はそこに、本研究のサブ・テーマのひとつ「徴候的知としての予見」に関わる論考Historische Erfahrung bei Aby Warburgを寄稿している。

「3. 研究の方法」の諸テーマに関する各研究分担者の研究活動とその成果は、研究期間中に本研究グループの全員で共有され、こうしたシンポジウムなどを通じて議論されたうえで、各自の研究にフィードバックされている。以下ではサブ・テーマとの関係を中心に、各研究分担者による具体的成果を挙げてゆくこととする。

サブ・テーマ「予見モデルによる社会思想の再検討」および「歴史における予見、その政治的な射程」に関わる研究活動として、中島隆博は「予見」座談会を2020年12月に開催した。提題者は高田康成氏(東京大学名誉教授)、山内志朗氏(慶應大学)、本間次彦氏(明治大学)で、司会には中島が務めた。高田氏はアウエルバッハの「フィグーラ」論について、山内氏はアウエルバッハに加えヘイドン・ホワイトのFigural Causationやトマス・アクィナスの予知論について、本間氏は中国の『易』における予見について64卦の成り立ちから論じた。総合討論では、「予見」は何らかの実践に結び付いており、単なる知的な作用ではないという点が確認された。予見は歴史叙述の異なる可能性を開きつつ、理想的な社会や政治を構想するものだからである。すなわち、

予見は実践に關与する知のあり方を開くものであり、決して距離を取った中立的な知ではない。こうした知見を踏まえ、中島は論考「根源的な偶然性に触れる」を發表しており、予見しうる偶然性と予見しえない偶然性を、九鬼周造と後漢の王充を比較することを通じて分析し、世界そのものの予見しえない根底的な偶然性を明らかにしている。

「予測処理理論による表象モデルの再検討」をめぐるのは、ジョン・オデイが知覚経験の多次元分析における予測処理理論のような新しい知覚表現理論の有効性を論じ、論文 *Perceptual constancy and the dimensions of perceptual experience* で発表した。また、2020年11月の科学基礎論学会では Morales, Bax and Firestone (2020)における遠近感の視覚経験をめぐる議論を吟味し、予測処理理論を含む知覚の表象内容に焦点を当てた近年の理論の立場からの考察を加えた。さらに、2021年7月の Australasian Association for Philosophy 年次大会では、感覚モダリティとは何かを考える際に、能動的な知覚の探求が重要であると主張する発表を行った。こうしたアプローチは、知覚を単に情報の受動的入力としてだけでなく、まだ知覚されていない物体や事象を探索し予測する能動的プロセスの一部として捉えることの重要性を強調するものである。予測処理理論を主軸とした以上のようなオデイの研究成果によって、予見を能動的知覚プロセスのうちに位置づける理論的展望が深化された。

「予見モデルによる社会思想の再検討」ならびに「カストロフィ論と予見の可能性」というテーマに関しては、桑田光平が哲学者ジャン＝ピエール・デュビュイの思想を再検討し、カストロフィの予見不可能性を、いかに既知の体系に組み込むことができるかについて、デュビュイ『ありえないことが現実になるとき』の翻訳(改訂版)の解説において論じた。桑田はまた、「作品と予見の時間構造」というテーマについて、現在のフランス語圏文学作品(ローラン・ペネ、レオノラ・ミアノ、ミシェル・ウェルベック)に見られる、ユートピア/ディストピア的未来世界を描いた予見的な作品を扱い、それらが持つ現状の政治批判と、すでに起こったはずの過去を再解釈させ変容させる力について分析し、『図書新聞』ならびに『ブリタニカ国際年鑑』で報告している。桑田はさらに、「予見におけるアクターとの相互作用」というテーマをめぐり、芸術家アルベルト・ジャコメッティが作品制作中に絵画や彫刻のモデルと結んだ終わらない対話(おしゃべり)というルーチンと、雑然としたアトリエという空間が、いかに作品制作におけるアクターとして機能したのかを分析し、論文「芸術家とモデル ジェームズ・ロードとジャック・デュバン」において発表した。

本研究グループは、「予見の思想史」というテーマを「予見のポエティクス/エステティクス」へと接続すべく、研究分担者である長木誠司が機構長、加治屋健司が副機構長を務める東京大学芸術創造連携研究機構との共催により、芸術制作をめぐるシンポジウムを2019年度末に計画していた。しかしながら、突然のコロナ禍により、このシンポジウムの実施が困難となり、やむを得ず一部の研究費を繰り越して2020年度に延期し、企画内容をよりいっそう充実させたうえで、シンポジウム「学問と芸術の協働 アートで知性を拡張し、社会の未来をひらく」として2021年3月に実施した。さらに、加治屋が中心となって準備された、2021年4~6月東京大学駒場博物館における「宇佐美圭司 よみがえる画家」展開催、および、そのカタログである加治屋編『宇佐美圭司 よみがえる画家』刊行は、この画家の制作行為における「予防装置(プリベンション)」の概念をはじめとする「予見のポエティクス」(とくにそのサブ・テーマである「前衛芸術における制作と予見の契機」)を集中的に検討する絶好の機会となった。宇佐美の活動・業績については加治屋が同カタログ所収の論文「宇佐美圭司 よみがえる画家」で美術史的な総括と再評価を詳細に行ない、とりわけ人型や横顔(プロフィール)の形を組み合わせた宇佐美の絵画について集中的に分析して、宇佐美が重視した「プリベンション」が複雑な現実世界に対する予見モデルと解釈できるとの結論を導いている。「プリベンション」については、田中も論考「自閉症者と文学・芸術をめぐる問題圏 認知文学研究からプリベンション論へ」において、自閉症者の世界知覚との関係性を分析している。

加治屋はまた、「徴候的知としての予見」をめぐる、英国の評論家ジョン・ラスキンの雷雲論における気候と道徳の関係について分析し、気候や自然を描いた絵画が道徳的な予見モデルとして一定の役割を果たしているとの結果を得て、2019年12月に東京大学で開かれたアジア理論ネットワーク(Asia Theories Network)のワークショップ「予測不可能な気象(Unpredictable Weather)」で「メディアと(しての)気象(Weather and/as Media)」を口頭発表したほか、「歴史における予見、その政治的な射程」に関係するものとして、アメリカにおいて「表現の自由」が保守派の論拠に使われる機会が増えた現象について検討し、「表現の自由」が芸術分野においては歴史的に保守派の論拠としても使われていたとの結論に達し、2021年6月のアメリカ学会におけるシンポジウム「表現の自由と不自由のあいだ」で、「表現と芸術のあいだ アメリカにおける「芸術の自由」と題する口頭発表を行った。

「前衛芸術における制作と予見の契機」と「音楽聴取における予見的機制」をおもに担当した長木は、「ライヴネス」をめぐる複数の論考を通じ、予見の問題系が音楽における「ライヴネス」の変容と大きく関わっている点を分析している。現代における音楽パフォーマンスの世界は、メディアに浸食され先行されるライヴネスの変容によって、ヴァーチャルないしメディア化されたライヴ・パフォーマンスと従来の意味でのライヴ性とのせめぎあいによって成立している。ライヴ自体がすでにメディア化されたものの影響下にあることは、フィリップ・オースランダーの主張する「ライヴネス」のひとつの主眼でもあった。かつてベンヤミンが複製技術論を始める際に映画を念頭に置いたこととは対照的に、オースランダーはライヴネスの議論の始まりにテ

レビを置くが、彼が仮想敵として選んでいるパフォーマンス理論の代表格であるペギー・フェランによる「パフォーマンス」の定義 パフォーマンスは一時保存できず、記録できず、ドキュメント化されない、あるいは表象の流通には参加できないという定義 は、本来メディア化されたパフォーマンスの事後性を物語るものであった。

これに対して、オースランダーはフェランの主張がすでに無効になっており、今日のライブ・パフォーマンスはメディア化されたパフォーマンスに吸収されていると考える。ライブに感じられてきた親密性や直接性は、すでにテレビのものになっており、ライブ・イベントはそもそもテレビがあることによって生きながらえているという主張がそれである。この問題に関してオースランダーが主張するロック・コンサートのあり方は、その実このジャンルを超えて、現在あらゆる音楽ジャンルに波及している。本研究において長木は、メディア化されたパフォーマンスの模倣としてしか成り立たない今日のライブネス、その意味では絶えず「予見」を前提としながらメディア化との時差のなかで行なわれざるをえないパフォーマンスの問題を、多ジャンルの問題として捉え直し検証している。他方で田中は、同様の問題意識のもと、こうしたメディア化されたパフォーマンスとしてのロックのあり方それ自体を先駆的に主題化したロック・ミュージシャンとしてのデヴィッド・ボウイについて、著書『デヴィッド・ボウイ 無(ナシング)を歌った男』でそのほとんどの作品について詳細に論じ、ボウイのいわば「メタ・ロック」的なメディア戦略が、条件づけられた予見から予見不可能な出来事を導こうとする方法意識によって貫かれ、そこに作品やジャンルの「可塑性」が生成されているメカニズムを明らかにした。

2020年以降のコロナ禍、そして、2022年2月のロシア軍によるウクライナ侵攻は、国際的な規模の社会的危機をめぐる予見(不)可能性を、「予見のポリティクス」をめぐるアクチュアルな問題として顕在化させた。コロナ禍については、田中が論考「ウンブラル 歴史の闘としての謎」で扱い、予見の不可能性自体を「謎」として能動的・積極的に把握する思考の意義を論じている。乗松亨平は「予見の思想史」「予見のポリティクス」の二重のテーマ系のもと、論文「空間の不安」および「結びつけ」の空間」ではロシアのユーラシア主義における民族の「生涯周期」の予見を含むシステム論を、論文「グローバリズムの外部より、地球の外部を想像するほうがたやすい」ではロシア宇宙主義におけるカタストロフィ論を分析しているが、これらは期せずして、ウクライナ侵攻の背景をなすロシア思想史に関する予見的考察となった。なお、乗松にはより直接的に現在の政治状況に関わる、現代ロシア思想をめぐる論考「ポストモダン右翼は哲学の夢をみるか? アレクサンドル・ドゥーギンの理論と実践」もある。

サブ・テーマ「予見モデルによる社会思想の再検討」および「歴史における予見、その政治的な射程」に関わる成果として、竹峰義和は論文「点になること ヴァイマル時代のクラカウアーの身体表象」(共編著『イメージ学の現在』所収)において、1920年代半ばから1930年代初頭のジークフリート・クラカウアーの著作に現われる身体表象を「点」というモチーフに着目しつつ考察することにより、近代における疎外・物象化の過程で生じる「個人」の解体という事態を、無限の潜勢力を秘めた新たな共同体の到来を予見するものとして捉え返すという視座がそこに見られることを明らかにした。

「性/身体のポリティクスと予見的パフォーマンスティヴィティ」をめぐるのは、清水晶子が性の権利に関する政治状況を歴史の反復と予見のパフォーマンスという観点から分析し、2019年ECPG(欧州ジェンダーと政治学会)で報告、さらにそれを発展させたものを2020年のUCパークレーでのInternational Consortium of Critical Theory Programによる招待講演で発表している。清水はまた、2021年には予見と未来の(再)想像という観点から、国際シンポジウム「フェミニスト/クィア・ユートピア&ディストピア」を開催し、クィアもしくはフェミニスト的な視点とユートピア/ディストピアの想像力の現在における接合について討議した。

森元庸介は3つのメイン・テーマに重層的に関係する内容として、ピエール・クロソウスキーのサド論を検討し、思惟(ないし予見された行動)がいわば自己証明の手段として実際の行動を要求しながら、モノマニーに駆り立てられた者としての倒錯者の形象を成立させるに至る過程を明らかにし、論文「思惟と倒錯」として発表したほか、同じくクロソウスキーのサド論を検討し、罪を予見することが罪を回避させると同時に罪への導因として働き、さらには他者の誘惑を媒介して独特な共犯性を成立させる一連の過程を、「イメージ」の語に着目しつつ解明した口頭発表「予見と行動」を行なっている。森元はまた、近世キリスト教道徳神学における「停思快(delectatio morosa)」の概念を検討し、未遂の行為を想像することから得られる独特の快のありようが萌芽期美学の成立にも関連することを論文「「停思快」について」で明らかにしたほか、藤子・F・不二雄、久生十蘭、カリン・ポイエの作品を比較検討し、他者の発話とその予測、また両者の齟齬が単にモチーフとしてのみならず、作品を構造化するファクターとして機能するありようを分析して、論文「心の声が聞こえてしまう」にまとめている。

研究代表者の田中は、本研究のメイン・テーマ全体に関わる論文を集成し、2022年4月に単著『イメージの記憶(かげ) 危機のしるし』を刊行した。同書の副題が「危機のしるし」であるのは、この書物が主題とする「イメージ」なるものが、危機の予兆においてもっとも顕著に表われるような、さだかならぬ何ものかのかすかな視覚的徴候 すなわち「予見」という謎めいた性格を帯びているからである。同書はそうように予見されるイメージの様態を考察するため、ブレードランパーの像行為論のほか、ボリス・グロイスによるアートをめぐる生政治論、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンのイメージ論などを総合的に検討したうえで、ディディ＝ユベルマンの「モンタージュ」概念の批判を通し、アビ・ヴァールブルク制作の『ムネモシユネ・

アトラス』の分析から導かれた「パラタクシス」の概念によって、イメージ論のあらたなパラダイムを提示した。本研究との関連で言えば、「パラタクシス」とは予見を促すイメージの存立構造と呼ぶことができよう。『イメージの記憶(かげ)』では、このパラダイムに通じる要素が、文化人類学者マイケル・タウシグのフィールドノート、宇佐美圭司の絵画論、シチュアショニストたちによる地図制作、作家パスカル・キニャールの「最後の王国」シリーズの書法といった実践のうちに見出されてゆく。

田中はさらに同書で、「しるし (signatura)」をめぐるジョルジョ・アガンベン の考察から出発し、明確な指示対象なき予兆的な作用を行なうイメージにおける予見の諸様態を多角的に考察し、とくにトランプ米国大統領の選出が深刻な政治的危機と受け止められた時代のカリカチュア画像や映画『シン・ゴジラ』の政治的図像学による分析を通じて、イメージの発する意味の不確定性ないし両義性・多義性が意味作用だけを過剰に昂進させるところに、いまだ定かならぬ出来事の「しるし」が生まれているというメカニズムを発見するに至った。このような「しるし」としての予見的イメージを考究するに際して、田中は古代以来の日本語における「かげ」の含意、および、そこに潜在する「うつり/うつし/うつろひ」の運動に注目し、先述した「パラタクシス」をそのような「かげ」が「うつり/うつし/うつろふ」、移動・置換・複写・反映の運動としてとらえ返す視座を得ている。このような「かげ」の論理の表われが予見としてのイメージなのである。そのようなイメージを存立させる「うつり/うつし/うつろひ」の運動においては、予見的な未来先取的時間性が余韻的とも言うべき記憶の過去回帰と重なり合っ て複合的な時間性をかたちづくっている。このような様相における予見のかつ想起のイメージは、本研究のサブ・テーマ「歴史における予見、その政治的な射程」および「救済論における予見の時間構造」に深く関わるヴァルター・ベンヤミンの歴史哲学において、「想起」と「救済」を結びつけている「イメージ (Bild)」と通底している。ベンヤミンが「想起」において一瞬間いたかと思うと失われてしまうものとして語る過去の「イメージ」とは、ありえたかもしれない過去を「救済」する未来の「予見」と位置づけられよう。田中の語法によれば、それは「予見的記憶」を担った「かげ」としての「しるし」である。

本研究の成果は研究分担者の旺盛な研究活動を反映して以上のように多岐に亘るが、これは「予見」が当初の目論見にあった思想史、ポエティクス/エステティクス、ポリティクスの3テーマを貫くコア概念として、思想・芸術・政治の各領域を横断的に広く論じる契機となりうることを如実に証明したばかりではなく、コロナ禍や戦争といった同時代現象ともリンクする、「危機的時代における予見(不)可能性」というアクチュアルな思想的課題にも応えるものであることを示している。このことによって本研究は、みずから「発見法的な知の創出の場」になるといふ課題を達成し得たと言えよう。

今後の展望として、本研究によって明らかにされた認識と創造の双方に働く「予見」メカニズムの複合的な時間性を「リズム」概念によって発展的に拡張する研究が計画され、中島を研究代表者として、本研究グループのメンバーが参加する研究課題「一般リズム学」を地平とする統合的思想史の構築」が科研費によって開始されている。この研究は、時間・空間の双方にまたがる広義の「リズム (rhythm)」を軸として、思想・文学・芸術におけるさまざまな作品や言説をあらたな視座のもとに統合することを試みるものであり、それにもとづく時代・地域横断的な思想史が「一般リズム学」の名のもとに構想されている。「予見」をめぐる本研究の成果は、複合的な時間性から生成するこの「リズム」の分析にあたって、重要な基盤をなすことになるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計52件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 田中純	4. 巻 584
2. 論文標題 パラ言語のキマイラたち 歌声の可視化をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 40-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中純	4. 巻 587
2. 論文標題 自閉症者と文学・芸術をめぐる問題圏 認知文学研究からプリベンション論へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 43-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中純	4. 巻 590
2. 論文標題 「カミ」なき時代の影向図 「かげ」の論理	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中純	4. 巻 593
2. 論文標題 『イメージの自然史』から『イメージの記憶（かげ）』へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 12-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 2022年1月号
2. 論文標題 磯崎新論(シン・イソザキろん) 前口上 第1章 沈んだ鳥、牡丹の庭	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 35-50
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 2022年2月号
2. 論文標題 磯崎新論(シン・イソザキろん) 第2章 前衛の季節	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 407-418
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 2022年3月号
2. 論文標題 磯崎新論(シン・イソザキろん) 第3章 (反)重力の衝撃	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 432-441
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 2022年4月号
2. 論文標題 磯崎新論(シン・イソザキろん) 第4章 (祖)父なる建築家	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 370-378
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Jun Tanaka	4. 巻 345
2. 論文標題 Couleurs du quotidien dans les photographies de Shigeo Gocho	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Revue des Sciences Humaines	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長木誠司	4. 巻 70-5
2. 論文標題 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(149)ライヴネス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 63-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長木誠司	4. 巻 70-6
2. 論文標題 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(150)ライヴネス(その2)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 55-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長木誠司	4. 巻 70-7
2. 論文標題 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(151)ライヴネス(その3)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 57-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島隆博	4. 巻 48
2. 論文標題 根源的な偶然性に触れる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 比較思想研究	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島隆博	4. 巻 48
2. 論文標題 わたしたちの共生 パーソナルなものをめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 世界思想	6. 最初と最後の頁 94-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加治屋健司	4. 巻 第73巻1087号
2. 論文標題 日本の美術アーカイブの現状	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kohei Kuwada	4. 巻 4
2. 論文標題 L'homme-boite de Kobo Abe et le medium photographique	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Revue internationale de photolitterature	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 桑田光平	4. 巻 55
2. 論文標題 酩酊するエクリチュール - アラン・マバンク 『割れたグラス』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 仏語仏文学研究	6. 最初と最後の頁 339-360
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑田光平	4. 巻 17
2. 論文標題 準備としての人生、あるいは再制作	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コメント通信	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑田光平	4. 巻 -
2. 論文標題 フランス文学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ブリタニカ国際年鑑	6. 最初と最後の頁 216-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乗松亨平	4. 巻 49巻7号
2. 論文標題 ポストモダン右翼は哲学の夢をみるか? : アレクサンドル・ドゥーギンの理論と実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 85-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乗松亨平	4. 巻 49巻14号
2. 論文標題 ドストエフスキーと共住の思想史：他者との非対話的な関係によせて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 239-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元庸介	4. 巻 24・25合併号
2. 論文標題 「停思快」について 決疑論から芸術論のひとつ手前へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 パトリスティカ 教父研究	6. 最初と最後の頁 79-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 572
2. 論文標題 ウンブラル 歴史の闘としての謎	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 36-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 575
2. 論文標題 イコノクラスムの彼方へ 像なき時代を創像する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 578
2. 論文標題 心理歴史的地図からイメージ記憶の散歩へ 『ムネモシュネ・アトラス』のアクチュアリティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 43-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 581
2. 論文標題 無の色気 ボウイ論の余白に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 51-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SHIMIZU, Akiko	4. 巻 23
2. 論文標題 “Imported” Feminism and “Indigenous” Queerness: From Backlash to Transphobic Feminism in Transnational Japanese Context	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Gender Studies	6. 最初と最後の頁 89-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水晶子	4. 巻 75:10
2. 論文標題 居どころのないわたしたちの、此处ではない此处	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 249-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乗松亨平	4. 巻 35
2. 論文標題 「結びつけ」の空間：後期ソ連における構造主義とユーラシア主義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 SLAVISTIKA：東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報	6. 最初と最後の頁 373-387
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 乗松亨平	4. 巻 49 (1)
2. 論文標題 グローバリズムの外部より、地球の外部を想像するほうがたやすい：「e-flux」とロシア宇宙主義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakajima, Takahiro	4. 巻 6
2. 論文標題 Confucian Modernity in Japan: Religion and the State	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 the Journal of Japanese Philosophy	6. 最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島隆博	4. 巻 105
2. 論文標題 世界哲学としての中国哲学・日本哲学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 二松學舎大学『人文論叢』	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島隆博	4. 巻 48-15
2. 論文標題 神に先立つ道 鈴木大拙と『老子』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 74-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島隆博	4. 巻 1161
2. 論文標題 『老子』読解の近代	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 8-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長木誠司	4. 巻 69(9)
2. 論文標題 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(141)「ヴィルヘルム・ブラーグ」ができるまで(その1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 59-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長木誠司	4. 巻 69(10)
2. 論文標題 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(141)「ヴィルヘルム・ブラーグ」ができるまで(その2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 59-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 560
2. 論文標題 それ(エス)の地下室(クリプト) ゲルハルト・リヒター《ビルケナウ》	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 49-55
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 563
2. 論文標題 「絆する言語(エコリアス)」の歌 デヴィッド・ボウイの作品における歯擦音と喃語をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 566
2. 論文標題 夜の共同体へ パスカル・キニャールに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 569
2. 論文標題 少年たち(ボーイズ)・兄弟たち(ブラザーズ)の秘密 デヴィッド・ボウイの共犯者たち	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中純	4. 巻 48-3
2. 論文標題 デミウルゴスのかたり 磯崎新の土星（サトゥルヌス）的仮面劇	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 166-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑田光平	4. 巻 5
2. 論文標題 芸術家とモデル ジェイムズ・ロードとジャック・デュパン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Art Trace Press	6. 最初と最後の頁 212-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加治屋健司	4. 巻 40
2. 論文標題 絵画化する装飾 カラーフィールド絵画とそのデザインの文脈	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 74-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SHIMIZU, Akiko	4. 巻 15
2. 論文標題 From Backlash to Online Trans-exclusionism: Response to the lecture by Prof. Peto	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Gender and Sexuality: Journal of the Center for Gender Studies	6. 最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水晶子	4. 巻 1151
2. 論文標題 埋没した棘; 現れないかもしれない複数性のクィア・ポリティクスのために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乗松亨平	4. 巻 1146
2. 論文標題 空間の不安: 一九八九年とロシア・ナショナリズムの比較文学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 93-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takahiro Nakajima	4. 巻 1
2. 論文標題 Open Philosophy	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SAI, International Association of Korean Literary and Cultural Studies, Sungkyunkwan University	6. 最初と最後の頁 227-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takahiro Nakajima	4. 巻 189
2. 論文標題 Constitutionalism and Sovereignty: On Constitutional Problems in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Telos	6. 最初と最後の頁 159-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長木誠司	4. 巻 68(3)
2. 論文標題 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(123)オペラ：愛の壊れるとき8《トゥーランドット》	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 57-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長木誠司	4. 巻 68(4)
2. 論文標題 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(124)オペラ：愛の壊れるとき8《トゥーランドット》(承前)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 57-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長木誠司	4. 巻 68(6)
2. 論文標題 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(126)オペラ：愛の壊れるとき(9)こびと,またはスペインの王女の誕生日	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 91-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 O' Dea John	4. 巻 21
2. 論文標題 Perceptual constancy and the dimensions of perceptual experience	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Phenomenology and the Cognitive Sciences	6. 最初と最後の頁 421-434
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計31件（うち招待講演 26件 / うち国際学会 17件）

1. 発表者名 田中純
2. 発表標題 アーカイヴの生政治 不死のテクノロジー
3. 学会等名 第4回多摩美術大学アートアーカイヴシンポジウム「アーカイヴの思想」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takahiro Nakajima
2. 発表標題 Universalizing tianxia in East Asian Context
3. 学会等名 PKU Bergren Institute “Tianxia in Comparative Perspective: Alternative Models of Geopolitical Order”（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takahiro Nakajima
2. 発表標題 Figurative Reality: Compound of Reality and Fiction in Kukai 's Shojijissogi
3. 学会等名 “Reality and Fiction in Philosophy and Literature” organized by University of Bonn, University of Tokio, and New York University（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中島隆博
2. 発表標題 王弼再考 否定神学を超えて
3. 学会等名 第二回中国文化研究国際論壇、東方学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takahiro Nakajima
2. 発表標題 Who Teaches What to Whom?
3. 学会等名 “ The Future of the Humanities and Social Sciences : Perspectives from the Sociology of Knowledge ” at Tokyo College (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 SHIMIZU, Akiko
2. 発表標題 “ She isn ’ t a feminist ” : The issue of “ improper objects ” of Japanese feminism
3. 学会等名 Asia Pacific Conference 2021 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 John O’Dea
2. 発表標題 Are there really Five Senses?
3. 学会等名 Australasian Society for Philosophy and Psychology Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 John O’Dea
2. 発表標題 The Senses: Active and PAssive
3. 学会等名 Australasian Association for Philosophy Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森元庸介
2. 発表標題 予見と行動、あるいはイメージの内乱
3. 学会等名 歓待・倒錯・共犯性 ピエール・クロソフスキーの思想をめぐって（東京大学UTCP / 科学研究費（基盤研究B）「予見（prevision）」をコア概念とした統合的思想史の構築」（研究代表者：田中純）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森元庸介
2. 発表標題 聞こえないはずの音が聞こえるとき
3. 学会等名 第38回土曜自由大学（清泉女子大学人文科学研究所 / 品川区）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森元庸介
2. 発表標題 西洋はいかにして演劇を許容し、芸術を愛するようになったか 決疑論と美学の誕生
3. 学会等名 日仏演劇協会第4回演劇講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桑田光平
2. 発表標題 パリに終わりはないのか En quete d'une ville（都市を求めて / 都市の調査）
3. 学会等名 オンライン・シンポジウム『テキストを建てる、イメージを歩く』（科学研究費補助金（基盤研究C）（研究代表者：小澤京子）主催）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森元庸介
2. 発表標題 偶像、この絶望的なもの：ユニカ・チュルン、カトリーヌ・ピネ
3. 学会等名 連続講演会「文学としての人文知 第4回「イメージの歴史」」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森元庸介
2. 発表標題 「停思快 (delectatio morosa)」について：夢想と創造をめぐる近代文学がキリスト教道徳神学から 学びえたこと
3. 学会等名 教父学研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中島隆博
2. 発表標題 フランスにおける『老子』受容
3. 学会等名 日仏東洋学会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kohei KUWADA
2. 発表標題 On the Concept of Surface; A Short Remark on Japanese Postmodernism in Literary Criticism
3. 学会等名 「World Literature as Japanese Literature」(NYU)（招待講演）(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水晶子
2. 発表標題 多様性の可視化がもたらす意義と課題: クィア・ポリティクス、商品化、ハイパー・ヴィジビリティ
3. 学会等名 JSSGS2019年度学会 基調講演 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIMIZU, Akiko
2. 発表標題 From Backlash to 'LGBT' Movement and Beyond: The Moral Conservatives and Feminist/Queer Left Politics in Japan
3. 学会等名 ECPG2019 (Amsterdam University) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIMIZU, Akiko
2. 発表標題 LGBT Diversity and the Queering of Tokyo
3. 学会等名 Inagaki 11 Seminar (University of Melbourne) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIMIZU, Akiko
2. 発表標題 Imported Hatred?: Japan's Transphobic Feminism in Transnational Context
3. 学会等名 国際シンポジウム: トランスジェンダーが問うてきたこと (お茶の水女子大学) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIMIZU, Akiko
2. 発表標題 'Imported' Feminism and 'Indigenous' Queerness: From Backlash to Transphobic Feminism in Transnational Japanese Context
3. 学会等名 Consortium of Critical Theory Programs (UC Berkeley) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyohei Norimatsu
2. 発表標題 "System" as a Holistic Space: Russian Old and New Eurasianisms and Structuralism
3. 学会等名 22nd World Congress of the International Comparative Literature Association マカオ大学(中国)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中島隆博
2. 発表標題 フランスシノロジーが読む孟子
3. 学会等名 二松學舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト・SRF共催シンポジウム「21世紀における『孟子』像の新展開」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takahiro Nakajima
2. 発表標題 Okinawa in the Eyes of Ota Masahide
3. 学会等名 Colloque international "Historians of Asia on political violence" (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中島隆博
2. 発表標題 桑木巖翼と中国哲学
3. 学会等名 シンポジウム「桑木巖翼と『哲学雑誌』」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中島隆博
2. 発表標題 日本における老荘思想の近代的受容
3. 学会等名 シンポジウム「東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から」第一回共同研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長木誠司
2. 発表標題 日本の音楽界の50年とこれから
3. 学会等名 サントリー芸術財団50周年記念シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長木誠司
2. 発表標題 Reception of the European contemporary music since 1990s in Japan
3. 学会等名 Music from JAPAN 45th Anniversary Season festival 2020 New York(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹峰義和
2. 発表標題 Wozu der Literaturwissenschaftler in dauerhafter Zeit? Ueber die Krise der Literaturwissenschaften in Japan
3. 学会等名 Workshop: Forschen - Foerdern - Evaluieren: Literatur(wissenschaft) als Projekt (ウィーン大学)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kenji Kajiya
2. 発表標題 Weather and/as Media
3. 学会等名 Asia Theories Network Tokyo Workshop, "Unpredictable Weather," University of Tokyo (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加治屋健司
2. 発表標題 表現と芸術のあいだ：アメリカにおける「芸術の自由」
3. 学会等名 アメリカ学会第55回年次大会シンポジウム「表現の自由と不自由のあいだ」(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計34件

1. 著者名 田中 純	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 360
3. 書名 イメージの記憶(かげ) 危機のしるし	

1. 著者名 長木 誠司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 株式会社音楽之友社	5. 総ページ数 224
3. 書名 オペラ 愛の壊れるとき	

1. 著者名 中島 隆博	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 432
3. 書名 危機の時代の哲学	

1. 著者名 中島 隆博	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 384
3. 書名 中国哲学史	

1. 著者名 中島 隆博	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 400
3. 書名 人の資本主義	

1. 著者名 岡崎和郎、大西伸明、加治屋健司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 MA2 Gallery	5. 総ページ数 42
3. 書名 Born Twice 岡崎和郎 / 大西伸明	

1. 著者名 長谷川祐子編、加治屋健司（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 199
3. 書名 ジャパノラマ 1970年以降の日本の現代アート	

1. 著者名 Kohei Kuwada	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 170 (61-66)
3. 書名 Pleasure and Fatigue of the Barthesian Text; , The Pleasure in/of the Text: About the Joys and Perversities of Reading	

1. 著者名 パスカル・キニャール（桑田光平ほか訳）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 229 (174-218)
3. 書名 ダンスの起源	

1. 著者名 ロラン・バルト (桑田光平ほか訳)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 565 (9-45, 459-465)
3. 書名 恋愛のディスクール	

1. 著者名 ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン (桑田光平・鈴木亘訳)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 248
3. 書名 受肉した絵画	

1. 著者名 泉水浩隆編、森元庸介 (分担執筆)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 352
3. 書名 『翻訳・通訳の過去・現在・未来』 (分担執筆: 「心の声が聞こえてしまう 藤子・F、十蘭、ボイエから」 (99-117頁))	

1. 著者名 Jun Tanaka, Yasuhiro Sakamoto, Felix Jaeger (eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 160
3. 書名 Bilder Als Denkformen: Bildwissenschaftliche Dialoge Zwischen Japan Und Deutschland	

1. 著者名 田中 純	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 646
3. 書名 デヴィッド・ボウイ 無を歌った男	

1. 著者名 桑田光平、横浜国立大学都市科学部	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 1052
3. 書名 都市科学事典（うち項目「都市記号論 リンチからパルトへ」）	

1. 著者名 桑田光平・本田貴久訳、ジャン＝ピエール・デュピュイ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 ありえないことが現実になるとき	

1. 著者名 桑田光平ほか訳、ハロルド・ローゼンバーグ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 305
3. 書名 芸術の脱定義	

1. 著者名 加治屋健司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 左右社	5. 総ページ数 328
3. 書名 トライアローグ 語らう20世紀アート	

1. 著者名 加治屋健司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学	5. 総ページ数 176
3. 書名 宇佐美圭司 よみがえる画家	

1. 著者名 清水晶子、伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ちくま新書	5. 総ページ数 320
3. 書名 世界哲学史8 現代 グローバル時代の知	

1. 著者名 Yosuke Morimoto	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Cerf	5. 総ページ数 325
3. 書名 La Legalite; de l'art. La question du theatre au miroir de la casuistique	

1. 著者名 森元庸介、大森晋輔	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 352
3. 書名 ピエール・クロソフスキーの現在（そのうち「思惟と倒錯 クロソフスキー「悪虐の哲学者」への注記」を分担執筆）	

1. 著者名 長木 誠司、久保田 慶一、白石 美雪、井上 郷子、森垣 桂一、池原 舞、伊東 信宏、梅本 実、小曾根 真、柿沼 敏江、今野 哲也、土田 英介、長島 剛子、中田 朱美、福田 隆、安良岡 章夫	4. 発行年 2020年
2. 出版社 アルテスパブリッシング	5. 総ページ数 292
3. 書名 楽譜でわかる20世紀音楽	

1. 著者名 田中純、渋谷哲也、夏目深雪ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 328
3. 書名 ナチス映画論	

1. 著者名 桑田光平ほか訳、ユベール・ダミッシュ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 336
3. 書名 カドミウム・イエローの窓	

1. 著者名 桑田光平訳、ジェラルド・マセ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 320
3. 書名 つれづれ草	

1. 著者名 加治屋健司、三浦篤、清水修	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学	5. 総ページ数 96
3. 書名 シンポジウム「宇佐美圭司《きずな》から出発して」全記録	

1. 著者名 中島隆博・石井剛	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 216
3. 書名 ことばを紡ぐための哲学 東大駒場・現代思想講義	

1. 著者名 中島隆博・伊藤邦武・山内志朗・納富信留編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ちくま新書	5. 総ページ数 314
3. 書名 世界哲学史 1 古代 I 知恵から愛知へ	

1. 著者名 中島隆博・伊藤邦武・山内志朗・納富信留編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ちくま新書	5. 総ページ数 284
3. 書名 世界哲学史 2 古代 世界哲学の成立と展開	

1. 著者名 中島隆博・伊藤邦武・山内志朗・納富信留編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ちくま新書	5. 総ページ数 280
3. 書名 世界哲学史 3 中世 I 超越と普遍に向けて	

1. 著者名 田中 純、竹峰 義和、坂本 泰宏編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 550
3. 書名 イメージ学の現在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中島 隆博 (Nakajima Takahiro) (20237267)	東京大学・東洋文化研究所・教授 (12601)	
研究分担者	竹峰 義和 (Takemine Yoshikazu) (20551609)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	清水 晶子 (Shimizu Akiko) (40361589)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	乗松 亨平 (Norimatsu Kyohei) (40588711)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	長木 誠司 (Choki Seiji) (50292842)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	オデイ ジョン (O'dea John) (50534377)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	加治屋 健司 (Kajiya Kenji) (70453214)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	森元 庸介 (Morimoto Yosuke) (70637066)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	桑田 光平 (Kuwada Kohei) (80570639)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 国際シンポジウム「フェミニスト/クィア・ユートピア&ディストピア：非規範的な欲望と身体を通して想像されるオルタナティブ・ワールド」	開催年 2021年～2021年
---	--------------------

国際研究集会 フンボルトコレーク東京2019「神経系人文学と経験美学」	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	マックス・プランク経験美学研究所			